

釧路市教育委員会 平成31年第10回4月定例会会議録

1 日時：平成31年4月8日（月）17時00分から18時00分まで

2 会場：釧路市教育委員会室

3 出席者

岡部義孝教育長

（教育委員）

山口隆委員、松尾千穂委員、種村俊仁委員、小出美貴子委員

（事務局）

高玉学校教育部長、川畑生涯学習部長、大山教育指導参事、
北澤学校教育部次長、江縁学校教育部次長、藤岡総務課長、
小野施設計画主幹、松本総括指導主事、外崎青少年育成センター所長、
森教育調整主幹、山口給食担当主幹、久保北陽高等学校事務長、
工藤生涯学習部次長、澤口生涯学習課長、永井美術館長、
佐藤博物館長、戸田学芸主幹、松本ふれあい主幹
牧野阿寒生涯学習課長、伏見音別生涯学習課長

4 議事録署名人 山口委員、小出委員

5 傍聴人数 0人

6 提出案件

【公開案件】

報告事項

- (1) 平成31年度小中学校児童生徒数等の状況
- (2) 平成31年度北陽高等学校入学生等の状況について
- (3) 平成31年度釧路市奨学生の決定について
- (4) 北陽高校における海外への修学旅行について
- (5) ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館等について
- (6) 平成31年度市立美術館事業について
- (7) 第13回全日本少年アイスホッケー大会（中学校・男子の部）の開催結果について
- (8) 学校の現状について

7 会議内容

【公開案件】報告事項

(1) 平成31年度小中学校児童生徒数等の状況

(江縁学校教育部次長)

今年度の新入学児童生徒の状況について、市立小学校の1年生は前年より51名少ない1,092名である。中学校1年生は前年より31名多い1,240名となっている。このほか、附属小学校の1年生は45名、附属中学校の1年生は99名、武修館中学校の1年生は12名となっている。

次に、市立小中学校全体の児童生徒数の動向について、学年別では小学校4年生と中学校1年生で若干の増加となったほかは、すべて学年において減少している。

また、小学生の総計は、前年度より251名減の7,113名、中学生の総計は、前年度より86名減の3,680名となり、毎年小学校、中学校ともに減少が続いている状況である。

一方で、特別支援学級在籍児童生徒は、小学校、中学校ともに毎年増加傾向にあり、小学校で459名、中学校で166名であり、総計で前年より18名多い625名となっている。

なお、今回の集計は4月1日現在のものであり、今後、学校基本調査等で使用される5月1日を基準とした報告値においては、若干の増減が生じるものと思う。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

釧路市全体の各学年の人数の推移は把握できるが、できれば各学校ごとの在籍数の状況を後日資料提供してほしい。学校によって、これが本当に子どもにとっての適正規模なのかという観点から考えると、検討しなければならない、そういう実態もあると聞いている。

特別支援学級の児童生徒数が、全体が減少している中で増加傾向であるという説明を受けて、今までもそうであったが、非常に判定をきめ細かくするようになった事と、困り感のある子どもにできるだけ早い時期に適切な対応をすれば、子どもの成長にとっては好ましい。昔から、保護者の理解がなかなか得られないという課題があったが、やはり保護者も我が子の状況を真正面から受け止めて、どういう適切な対応が必要か、保護者の理解も深まったため、数が増加したと考えられるのか。

(江縁学校教育部次長)

平成19年特殊教育から特別支援教育に変わって、一人ひとりの障がいの状況に応じて、例えば個別の教育支援計画や指導計画を立てられる、きめ細かな教育が進められているという事で、保護者の皆さんの特別支援教育の選択する方が増えているのではないかと、むしろ増えている事自体が、悪いことではなく、むしろ良いことに近いと認識している。

(小出委員)

特別支援学級の18人増は、今年度入学した子が最初から特別支援学級に入るという事ではなくて、途中の学年から、今年から特別支援の学級に入った子も含まれての人数ということか。

(江縁学校教育部次長)

特別支援委員会で判定を受けて、もしくは保護者の意向を受けて途中でも判定の結果によって、新しい学級に行く子どももいる。

(種村委員)

中学校の1年生が唯一、31名前年度より増えているが何か原因はあるのか。

(江縁学校教育部次長)

探してみたが、結果的には分からなかった。新1年生は、平成18年4月2日から平成19年4月1日生まれ、合併の時にあたるが、ただ合併で増えたと言っても、次年度以降が減っているので要因ではない。たまたま出生数が多かったと考えている。

(山口委員)

去年の中学校1年生の数に比べると、去年の6年生の数が単純に多かったということか。

(江縁学校教育部次長)

6年生、5年生、4年生遡っていくと、その学年だけ増えている。中学校1年の31年はその前の小学校6年生でも増えているし、5年生、4年生と、この学年だけ増えている。

(松尾委員)

小学校も中学校も1学年につき大体1000人から1200人くらい的人数で、特別支援の人数は大体60人から80人くらい的人数になっているが、中学校では、少し下がっている。このあたりは、小学校から上がった子どもが普通学級に行っているという数字なのか。

(江縁学校教育部次長)

そこまでわからない。

(松尾委員)

学年ごとの人数としてはそれ程変わっていないが、中学校へ行くと、少し特別支援学級が減っているというのは、たまたまこの学年が小学校の時に少なかったのか、それとも、普通学級に行った子が増えたのかわかれば教えてほしい。

(山口委員)

小学校卒業する段階で保護者の意向で中学校からは普通学級でやりたいというリクエストはあるのか。

(大山教育指導参事)

小学校の場合、自閉・情緒学級の子が多く、年齢が進みある程度の指導を行えば、落ち着いて生活が出来るようになるので、そうすると特別支援学級に在籍する必要がないので通常学級に在籍変更する子が多くなる。保護者の意向としても中学校では通常学級から公立の高校に行きたいという希望が多いので、人数的にこのような推移になっているかと思う。

【公開案件】 報告事項

(2) 平成31年度北陽高等学校入学生等の状況について

(久保北陽高等学校事務長)

平成31年度の新入学生数は定員の240名となり、入試選抜では定員に対し推薦61名を含む255名が受検し、倍率は1.1倍であった。新入学生を含めた4月8日現在の在校生数は713名である。

続いて、平成30年度卒業生の進路状況は、進学については希望者170名に対し166名が決定し、決定率は97.6%である。また、就職については、希望者68名全員が決定し、決定率は100%である。進学者の内訳は、国公立大学10名、私立大学42名、短期大学20名、看護専門学校36名、専修学校が58名である。

また、就職者の就職先の地域区分は市内管内が49名、道内が18名、道外が1名で、職種については事務職26名、営業7名、サービス5名、生産労務その他9名、公務員21名である。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(松尾委員)

就職率100%は素晴らしいと思う。就職者のうち、管内の中で市内はどの程度いるのか。

(久保北陽高等学校事務長)

管内と市内の区分した資料が手元になく、求人票の区分で分けているが、例えば銀行は管内の募集で就職して、結果的に市内の支店に配置になっている場合がある。後ほど調べてお知らせする。

(松尾委員)

入学式に参列して、皆さん凛々しい姿で新一年生が北陽に来て良かったなときっと思ってもらえると思う。こういう結果をみて、子ども達も希望が持てると思う。

(山口委員)

看護学校が36名ということだが、今の看護師を目指す子ども達の受け入れる側のニーズとしては、専門学校ではなく、看護大学を卒業した資格を持った看護師をという受け入れ側のニーズとしてある。国公立大学10名の中に看護大学に進学した生徒はいるのか。

(久保北陽高等学校事務長)

国公立大学にはいないが、私立大学の日本赤十字北海道看護大学1名、他の医療系では日本医療大学1名、北海道医療大学1名の3名がいる。

(岡部教育長)

今日の入学式の校長の式辞の中で、今後フィールド制から単位制を目指していくという発言があったことを受けて、保護者から何か意見や声が上がったという実例があれば聞きたい。

(久保北陽高等学校事務長)

本日のところは、単位制、フィールド制への質問はなかった。

【公開案件】 報告事項

(3) 平成31年度釧路市奨学生の決定について

(江縁学校教育部次長)

最初に平成31年度の奨学生の募集人数及び応募状況について、貸付の財源の違いから、釧路・音別地区と阿寒地区の2つの地区に分けて報告する。なお、阿寒地区の枠については、前田一步園財団様からの寄付が原資となっている。

高等学校、高等専門学校募集については、それぞれ前年並みの募集枠を設定して募集をしたが、どちらも応募はなかった。専修学校・大学の募集については、釧路・音別地区35名、阿寒地区6名、合計41名の募集に対し、釧路・音別地区21名、阿寒地区2名、合計23名の応募があった。それに伴い、選考結果については、3月26日に開催した釧路市奨学審議会において、学業・人物・身体及び家計の状況などから総合的に審議し、専修応募者23名全員が採用となった。

しかし、審議会終了後に、釧路・音別地区の大学の採用者のうち、1名が奨学金を辞退したため、平成31年度奨学生の人数は最終的には22名となっている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

奨学金の返納、返済は昔は全然返してもらえなくて頭を抱えていた時期もあったように記憶しているが、最近は順調に返済してもらえているのか。

(江縁学校教育部次長)

今までの積み残しが、約3000万弱ある。最近は大きな滞納はない。

【公開案件】 報告事項

(4) 北陽高校における海外への修学旅行について

(久保北陽高等学校事務長)

2月の定例教育委員会で報告のとおり、北陽高校は2022年度より現在のフィールド制から単位制へ移行し、「国際理解教育の充実」などを柱とした教育活動を進めることとしており、これを見据えた取組として、2020年度に実施する修学旅行から見学先を台湾とすることにした。

台湾については、親日で治安がよく、現地高校との交流など受け入れメニューも充実しており、修学旅行先としている高等学校が全国的に増加している状況にある。

特に台湾北部の台北市は、釧路市動物園から台北動物園へ無償貸与しているタンチョウの

人気が高く、また、国立台湾博物館ではマリモの企画展が開催されるなど、釧路市との縁が非常に深く、台北市への訪問は海外から日本の、そして釧路の歴史、文化を学ぶ大変よい機会になるものと考えている。

なお、本日午後の入学式の後に開催をした新入生保護者説明会において、保護者の皆様に台湾への修学旅行について説明をしたところ、特に反対意見はなかった。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

今年の新入生が台湾へ修学旅行する、これはあくまでも点である。せっかく台湾に行くのだから、北陽高校と台湾のどこかの高校との姉妹校などの繋がりができれば、点から線へ、子ども達も国際理解教育がより深まるという事もあるので、今現時点でデザインできていなくても今後の進め方の中で、そういう取組が可能であれば、一考いただきたい。

(岡部教育長)

やる予定である。

(松尾委員)

新2年生は、国内ですることがもう決まっているのでかわいそうかなと思う。できれば、修学旅行が終わってから発表してあげた方がよかったのではないかな。

(岡部教育長)

国際理解教育という事も、一つありつつ、やはりフィールド制から単位制を含めた北陽高校が特色ある学校として生まれ変わるための一つの方途という事をご理解いただければと思う。

【公開案件】 報告事項

(5) ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館等について

(澤口生涯学習課長)

ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館状況等について報告する。

今年は10連休となる事から、阿寒町公民館、図書室と音別町ふれあい図書館については5月3日を特別開館とする。

なお、阿寒国際ツルセンター別館タンチョウ観察センターについては夏期休館中となっている。柳町アイスホッケー場及び釧路アイスアリーナについても開設期間外のため、休館中となっている。

◎特に意見はなし。

【公開案件】 報告事項

(6) 平成31年度市立美術館事業について

(永井美術館長)

展覧会について、今月の日程は、現在ギャラリーAにおいて「人への想い 揺れる人間像」を開催中である。

次に本年度特別展の1本目として、今年27日(土)から6月23日(日)まで、「現代オートマタがやってきた!英国自動人形展」を開催する。オートマタとは「西洋のからくり人形」を表す言葉で、自動で動く機械仕掛けの人形として知られている。本展では、現代のオートマタ作家の作品を中心に、イギリスの自動人形や図面などの資料を展示するほか、実際に模型を動かすことができる体験コーナー等も用意する。

特別展の2本目は、7月2日(火)から開催する「138億光年 宇宙の旅展」である。昨年60周年を迎えたNASA(米国航空宇宙局)は、アポロ計画、スペースシャトル計画などの有人宇宙開発、また、宇宙の観測など偉大な功績を残してきた。本展では、NASAの惑星探査機や宇宙望遠鏡などがとらえた膨大な宇宙の画像約100点を公開する。

次に、特別展の3本目は、9月7日(土)から開催する「没後30周年 木下 勘二展」である。夕張市出身の木下勘二は教員として勤めるかわら、道展などに出品した油彩画家であり、昭和45年釧路江南高校に赴任してからも、制作活動とあわせて美術の指導者として多くの人材を育ててきた。没後30年となる節目の今年、夕張市美術館と当市所蔵作品をあわせた約70点を一堂に公開し、半世紀にわたる画業を振り返る。他にも、所蔵作品展や道展・釧路移動展、釧路郷土作家展も例年どおり開催する。

またその他の事業としては、所蔵作品等巡回事業として、阿寒・音別地区での美術館所蔵作品の公開なども予定している。

◎特に意見はなし。

【公開案件】報告事項

(7) 第13回全日本少年アイスホッケー大会(中学校・男子の部)の開催結果について

(工藤生涯学習部次長)

平成18年度より実施している全日本少年アイスホッケー大会(中学生・男子の部)の第13回大会を、3月23日から27日までの5日間の日程で開催したので、概要を報告する。

本大会はアイスホッケーを通じて中学生の憧れとなるスポーツ拠点を目指すとともに、スポーツの振興と地域の活性化を図ることを目的とし、本年度は地元選抜の2チームを含め、全国各ブロックから選抜された23チームが参加し、選手や関係者など約500名が来釧した。

大会日程は、6ブロックに分かれての予選リーグ戦と決勝・順位決定トーナメント戦のほか、スケートやシュートの技術を競うスキルチャレンジが行われ、選手はもとより観

客も大いに盛り上がった。

また、日本製紙クレインズの選手と選抜されたメンバーによるエキシビジョンマッチも実施され、参加した選手や関係者にとって、思い出に残る大会となったものと感じている。

大会結果については、2連覇を目指した釧路選抜Aを準決勝で下した苫小牧選抜が帯広選抜との決勝戦を4対1で制し、4年ぶり3回目の優勝を勝ち取った。

大会の開催にあたっては、毎年、地元競技団体の献身的な運営協力と市民ボランティアによる支援、さらには有志の方々による「おもてなし」など、地域が一体となって支えていただいた。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

3位決定戦を観て、中身が充実していて子ども達の頑張っている姿をみて、大いに盛り上がった。決勝戦に進んだ苫小牧と帯広は高校でもそうであるように、北海道のアイスホッケーの勢力分布を考えると順当なところだと思う。たまたま、今回準決勝で苫小牧に負けたが、決勝に進んだ苫小牧と帯広は、それだけ強かったということで敵に敬意を表したい。希望としては、釧路Aチーム、釧路Bチームがあるが、Bチームがいつも予選で負けて順位決定戦にしか進めていない。いつの日か、決勝戦を釧路Aチーム、釧路Bチームでやっている姿を見てみたいという個人的な希望がある。

【公開案件】報告事項

(8) 学校の現状について

(大山教育指導参事)

初めに平成31年度の研究指定校の募集及び公開研究会の開催について報告する。昨年度からの継続校として東雲小学校・美原小学校・美原中学校の3校が指定校2年目となる。今年度は新たに3校の研究指定校を募集中である。これまでのように実物投影機等のセットとはしていないが、3月の予備調査において6校程度から希望があり、選考をして今年度の指定校を決めたいと思う。また、継続研究指定校は、10月、11月に公開研究会が予定されているのでぜひご参加いただきたい。

次に全国学力・学習状況調査について報告する。4月18日(木)に実施する予定であり、今年度は新たに中学校英語が加わる。さらに、例年、「主として『知識』に関する問題」のA問題と、「主として『活用』に関する問題」のB問題の出題となっていたが、今年度から一体となった問題で出題されることとなっている。一番心配なことは、中学校の英語が加わったことで、ヒアリングに関する準備が心配であり、各学校に徹底していく事と、もしも不都合が生じた時にどのように対応していくか、もう一度各学校に通知したいと考えている。

また、事後については小学校から中学校への点数がどのように変化したかが見えるシステ

ムになっているので、今年度についても小学校から個人カードを中学校へ送る作業を進めたいと考えている。

次に、指導資料「釧路市の教育」(第69号)ができあがって、釧路市小中学校の全ての教職員に配布した。この中には、平成25年度より第1章に「釧路市学校改善プラン」を位置づけ、全国学力・学習状況調査や釧路市標準学力検査から見受けられる釧路市の子どもたちの傾向と授業改善の具体例が示されている。いつも問題になるが、各学校の教職員がしっかり読んでいるのかということが、大きな課題である。今年度、まず研修授業でこの資料を持ってくるよう、教職員に意識させたい。次に、研修授業の中で、この指導資料を使いたい。さらに、1学期中に小学校では校内研修で、中学校では教科担当の打ち合わせの中で、この資料を使うよう、校長会で具体的なお願いをしたい。これについては、すでにやっている学校が3分の1くらいあり、全ての学校での取組が可能だと考えるので、そのように話をしたいと考えている。

また、研修授業については教職員の資質能力に関わる大事な部分なので、自校の全ての教職員に周知することが必要な講座内容とその受講者の個人の資質能力に関わる講座内容がある。これについては、二つに分けて周知の方法をこれから検討していく。教育委員会の取り組んでいる事が、各学校の教職員の手元まで届くよう頑張っていきたい。

次に、長期休業中の補充学習について、市内では以前より取り組んでおり、最近の傾向として学校間格差が広がっている。学校によってはコース別に補充学習をしている学校や、教材を用意している学校もある。長期休業中の宿題を持たせてそれをやらせているだけの時間になっている学校もある。その事もあり、工夫して取り組んでいる学校の例を紹介しながら、各学校で工夫しながらレベルを上げていただきたいという話もしたいと考えている。

最後に、今年度の研究会と記念行事について報告する。全道書写書道教育研究大会が9月13日(金)、全道言語障害児教育研究大会が9月13(金)・14日(土)、全道学校体育研究大会が10月11日(金)、女性管理職釧路大会が8月9日(金)に開催される。また、中体連については共栄中学校が事務局となり、全道中学校スケート大会が来年1月11日(土)から開催される予定である。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

学力向上に関わって、昨年度の定例教育委員会の中でも各学校にこうあってほしいという、意見を述べて、それが今の参事の説明の中で具体的な今年度の進め方は理解できたので、是非、実効性を伴う形で各学校が取り組めるように、校長会でこうやりましたというだけでは、実態として今言ったような学校間格差が生まれたりするので、校長先生方が一人の先生にしっかり寄り添って、ある部分では、かみ砕いてこうやっていこうという、そういう取組が必要なのではないかと思うので念押ししてほしい。

また、研究指定校の募集で美原小学校、美原中学校それぞれ11月1日と22日に公開研

があるが、美原小、中学校は地域など、いろいろな部分で重なっていると思う。ある部分、教育課題や地域の課題など共通している部分があるのではないかと思う。美原小、中学校の研究主題や具体的な取組の中で、何か関連性があるのか、あるいは教育支援課の両校に対する関わりの中で美原地区に共通してこういう課題があるので、この部分を何とか一緒に指定校の取組の中で取り組んでほしいと教育支援課からの具体的な関わりや対応があれば、小中の関連性も含めて説明してほしい。

(大山教育指導参事)

美原小学校、中学校については、小中連携という形で昨年度についても教職員が全員集まって研修を進めている。その中で、学習指導に関わること、生徒指導に関わること、特別支援に関わることを行っている。今回の公開研究会についても、そのあたりの関連性は出てくるかと思うが、同じ日に小中連携という形はなっていない。この2校については、いろいろな課題のある地域だが、ある意味地域と一体になって取り組んでいるという特色ある学校なので、それを生かして特色ある教育区画になるように今後も指導していきたい。

(山口委員)

いろいろな指定校の研究会に行った時、同じエリアの中で小学校の公開研に同じ地域の中にある中学校の先生方の参加が極めて少ない。あるいは逆パターンで小学校の先生が中学校の公開研に極めて少ないという状況に課題を感じている。美原小学校と中学校は幸い公開日が違うので、小学校の公開研に中学校の先生が大量に来るなど、教育課程の編成等で、少し工夫が必要かもしれないが、逆に小学校の先生が中学校の公開研を観るなど、共に観て学ぶスタイルを拡大出来るような働きかけも是非今後、両校に対してしてもらいたいと思う。

(大山教育指導参事)

今年度より小中連携で公教研の時間の1時間を小中連携で使うことになっている。各校区ごとに必ず連携を進める話になっている。その時に、合わせて公開研の参加や校内研修の交流を含めて各学校にお願いしたいと思う。

(小出委員)

長期休業中の補充授業の話があったが、いろいろな学校を見学させてもらい、各学校の差を感じていたので、改善されればいいなと希望をもって聞いていた。ただ、中学校は部活動との絡みもあって出たいけれど出られないという場合や、学校の宿題やプリントをやるだけなので出なくていいやと参加率が上がらないところもあるので、工夫して参加率を上げるようにやっていただきたいと思う。また、全国学力学習調査のA問題、B問題がなくなったというのはどういうことなのか。

(大山教育指導参事)

今まで、計算の問題だけだとか規則に関わる問題だけのA問題があったが、今度は文章題の中にA問題も基礎基本も問う中身が入っているという事で、今までよりも非常に難しくなっていると考えていただきたい。読解力がないと簡単な計算が出来ても答えられないので、若干、今回の結果も注視しながら見ていかなければならない。あわせて、授業改善も今までと少し違う視点を持たなければならぬ。今回の結果を見ながらやっていきたい。

(山口委員)

道教委が新中学校1年生の公立高校の入試問題から総合力を問う出題内容に変える方針を出したが、大学の入試が変わった事に対応するための一連の流れの一貫だと思う。そう考えると鈴木知事が「ピンチをチャンスに」という、キーワードでいろいろインタビューに答えているが、今まで中学校は、よく取り上げられるのは国語と数学で、他の教科の先生は国語と数学でなくて良かったと受け止め方をしていた先生方も公立高校の入試問題が変わっていくという事は、全ての教科の先生方が一斉に学校を挙げて子ども達の学びについて考えていかなければならない時期にもなる。今まで教科の壁があって管理職の指導性が発揮できなかったという中学校の体質を払拭して全部で取り組む、一歩前に踏み出しましょうという取組も可能になる、ピンチだけどチャンスになるという捉え方もできると思う。是非そのような形で取り組んでいただきたい。